

經典餘師

小學之部

三

口 11
1029
13

讀法

小學卷之五

外篇

小學卷之五

外篇前に詠



詩に曰く天

生民と生ず

物有バ則有

民の秉と秉

是懿徳と好

孔子曰く此

詩為者其道

小學卷之五

詩曰天生烝民有物有則民之

秉彜好是懿徳詩經に天地の間この

多その人民に就て何一事も道なきもの則あり

くも物に君臣父子夫婦朋友の道をいふ

朝夕もあつた事より鳥獸草木にいつても各

各理とてあつて法則あるもの人へ彜にその義

理と秉守るべきことと好むことと懿徳といふ人の性

の善けれ元より是懿徳と好む心なるものなり

孔子曰爲此詩者其知道乎故

有物必有則民之秉彜也故好

有民之尋（子）秉故（是）懿德（也）學（子）

傳記（と）歷（し）

言（と）述（し）善行（を）

外篇（と）為（す）

嘉言第五

橫渠張先生（曰）

日（小兒）教（ふ）

敬（と）要（す）今世（に）

學（と）講（で）不（可）

男（女）幼（從）便（に）

騎（惰）壞（了）

壞（了）

長（す）到（る）益（く）

凶（狼）只（未）

當（て）子（弟）之（事）

未（嘗）為（子）弟（之）事（を）

則（於）其（親）

已（に）物（我）有（る）

止（於）屈（下）不（可）

病（根）常（在）又（隨）所（居）而（長）至（死）只（依）

所（に）隨（て）而（長）

死（に）至（て）只（舊）

依（子）弟（之）事（を）

對（に）安（す）灑（掃）應（對）

朋友（に）接（れ）則（可）

朋友（に）下（る）能（可）

是懿德

聖人（の）詩（の）作者（と）譽（て）道（と）

懿（德）

歷傳記接見聞述嘉

言（と）紀（し）善行（を）為（す）小學（外）篇（余）子（の）詞（を）

嘉言第五

橫渠張先生（曰）教（ふ）小兒（先）要（安）詳（恭）

敬（と）以（て）示（す）小兒（と）教（ふ）の肝要（を）今世（に）

學（と）不（可）講（で）男（女）幼（從）便（に）騎（惰）壞（了）今世（に）

只（為）未（嘗）為（子）弟（之）事（則）於（其）親（已）

有（物）我（不）肯（屈）下（年）長（に）益（凶）狼（つ）

教（と）為（さ）る（と）親（子）の間物（我）有（る）

病（根）常（在）又（隨）所（居）而（長）至（死）只（依）

舊（病）の根常（に）滋（養）て身の居所（に）為（子）弟（之）事（を）

則（不）能（安）灑（掃）應（對）中（小）學（の）勤（を）

朋友（に）接（れ）則（可）朋友（に）下（る）能（可）

長（則）不（能）下（官）長（為）宰（相）則（不）能（下）

長（則）不（能）下（官）長（為）宰（相）則（不）能（下）

不幸捐爲則
天下之賢に下
と能は不

其に則ち私意
に徇ひ義理都て
喪ふ至(於)

也只病根去
不居所接所に
隨ひて而せ長ず
る爲なり

楊文公家訓に
曰く。童穉之學
ハ記誦に止不其
良知良能と養
ひて先入之言と主
と爲す(童)度

日に故事を
て今古に拘る不
必ず先。孝弟忠
信。禮義廉耻等
の事と以てす

黃香が枕を扇
陸續が橘を懷
み。叔敖が陰
德ある。子路が
米と負之類の
如く

天下之賢

朋友又ハ官長に。我身と下す。中へ出で
來ぐ。況て不徳小人なるもの。天下の
宰相とす。たる人ハ賢徳ある人より卑と下げ
うす。やうなる。出來か。さるる。

於徇私意義理都喪

甚則至

作法も。也。也只爲病根不去隨所居所
て喪ひぬ。是皆病根ある。又接る所の惡に

接而長

是皆病根ある。又接る所の惡に

楊文公家訓曰

楊文公とのる學者の童

穉之學。不止記誦養其良知良能當

以先入之言爲主

童穉の學問ハ必書
物と誦讀に。又ハ記錄

と事とする。及。ト。良に知と。自然に父母
を親むと知。良に能。自然に行。道ある

その生。在所の善と養。總て幼稚
内。固。先に入。事。主
と。善。内。入。後。惡事に
深。惡。入。惡。日記

故事不拘今古必先以孝弟忠信禮

義廉耻等事。その善事と以て養。外
徳ある人の行。記。古。今。の別
及。或。親に孝。忠に。忠。信の

道。禮義の方。如黃香扇枕陸續

に利。如黃香扇枕陸續

懷橘叔敖陰德子路負米之類

孝弟

母。人。黄香。貧。蚊帳。陸續
母の爲に扇。持。蚊。暑。陸續

つ。客の座席。橘。子。船に贈。懷
。叔殺。而頭の蛇と殺。母。や

只俗説の如く便ち此道理と曉し。久々に成熟徳性自然の若るらん矣

明道程先生曰子弟之輕俊

只如俗説便曉此道理久々成熟徳性若自然矣道理と曉して久々人心の成熟せば自然に性實の徳にかなるなり

○明道程先生曰憂子弟之輕俊者

只教以經學念書と以て

只教以經學念書明道先生の語なり。今の世の弟子は不行儀よく

文字と作る令と得ず子弟凡百の玩好皆志と奪ふ

不得令作文字子弟凡百玩好皆奪志

書札に至る儒者の事に於て

至於書札於儒者事最

最也然則一向好著亦自喪志

近然一向好著亦自喪志書札文章手跡の事ハ近く入用の品なり然れども一向に好著れば又志を失ふなり

伊川程先生曰教人未見意趣必

伊川程先生曰教人未見意趣必

未^ま意^い趣^すと見^み未^ま
 必^{かならず}望^{ぞと}と樂^は
 不^ふ且^{かつ}之^のに歌^{うた}舞^ま
 教^しく欲^{ほつ}す未^ま二渡^{にわた}
 古^{ふる}詩^し三^{さん}百^{ひゃく}篇^{へん}の如^{ごと}
 きに皆^{みな}古^{ふる}人^{ひと}之^の作^{さく}
 關^{かん}雎^{しゅう}之^の類^{るい}の如^{ごと}
 家^けと正^{ただ}す之^の始^{はつ}な
 り。故^{ゆゑ}に之^のを御^ご
 人^{ひと}に用^{もち}ひ。之^のを邦^{はう}
 國^{こく}に用^{もち}て。日^ひに八^{はつ}
 に一^{いち}と聞^{きこ}使^し。

此等の詩其言
簡奥みて。今の
人未曉易く未
別に詩と作て畧
童子に灑掃應
對。長に事之節

不樂學欲且教之歌舞伊先生仰ける人の意趣の
善き場と見つめて教るはよろしきなり。いふこと意趣
と見得ざるうづの學。いふと領ざるなり。古樂と舞歌
ハ性情の正と心得身
體とやいふなり
 如古詩三百篇皆古
 人作之如關雎之類正家之始故用
 之鄉人用之邦國日使人聞之詩經三百篇の
内始ある關雎。いふたも家と正男女の交義
正とわり。依て國郷に用ひて時に人に聞しめて可く
 此等詩其言簡奧今人未易曉別欲
 作詩畧言教童子灑掃應對事長之
 節令朝夕歌之似當有助詩ハ言簡くして

と教ふと言ひて
朝夕に之を歌は
令ふと欲ふ當に
助有當に似たり

未當二度

陳中心誦公曰く
幼學之士先人
品之上下を分別
するに要す。何者
是聖賢爲所の
事何者是下
愚爲所の事と
善に向惡心に背き
彼と去此と取此
幼學の當に先に
す當所也(當に度

〇陳忠肅公曰。幼學之士。先要分別
 人品之上下。何者是聖賢所爲之事。
 何者是下愚所爲之事。向善背惡去
 彼取此。此幼學所當先也。
 幼學の時より學者の第一先として當心得あり。何
 者や。聖賢の所爲や。何者や。下なるは
 の所爲や。人の品々上下の別と肝要とをんべ
 彼惡と去りて此善と向取べし。

至未^レ能^レ知^レ此^レ則^レ顏孟之

為賢人。今學者若能知此則顏孟之事我亦可學^{道に志向し高き人なり}

言温^レ而^レ氣和^レ遷^レ不^レ漸^レ可^レ學^可

氣和則顏子之不遷漸可學矣^{言温而}

過^レ而^レ能^レ悔^レ又^レ不^レ憚^レ改^レ則^レ顏子之

不貳漸可學矣^{又過失を知て心に悔て改}

如^レ不^レ知^レ慈母之愛三遷^に

埋鬻之戲不如俎豆念慈母之愛至

至^{と念}於^念

於三遷^{孟子幼少の遊戯に葬禮をたづねて死}

幼自老に至て^{厭不改め不終始}

幼至老不厭不改終始一意則我之

動^さ不^さ亦^も以^て孟子の如^う可^可

不動心亦可以如孟子矣^{幼少より年}

夫志^と立^と則^ち其^の學^び比^て常^に

志不高則其學皆常人之事語及顏

敢て當り下等也其
 心に必ず日く我
 孩童為豈敢
 顔子孟子學
 此人にして上と
 語り下等先生長
 者其卑下と見
 豈肯之與語ん
 哉先生長者肯
 て之與語らん
 則ち其與に語
 所皆下等の人
 也(矣)

豈敢學顔子哉
常人の志向の立ち昇りて
 顔子孟子の語にやう時ハ
 我等何ぞやの賢人の場所にあぐさるん
 我我等の智やと孩童やと顔子孟子の事ハ學
 へきふやば 此人不可以語上矣先生長
 者見其卑下豈肯與之語哉先生長
 者不肯與之語則其所與語皆下等
 人也
り上品なる事相語さるべしあり。先生
 たる人又ハ年長のが。さうに志向の野下と見
 てる相変相語さるべしなかり。さうれば面くら會
 言不忠信下等人也行不
 篤敬下等人也過而不知悔下等人

悔と知不下等の
 人也悔而改むと
 知不下等の人也
 下等之語と聞下
 等之事と為い譬
 房舎の中に坐し
 四面皆牆壁と云
 如也開明と欲
 雖得可らず不矣

也悔而不知改下等人也聞下等之
 語為下等之事譬如從坐房舎之中
 四面皆牆壁也雖欲開明不可得矣
下等人の爲と云う第一に言語虚多にて中心信
 行輕薄なり篤敬なり過失と云て心悔む
 かり又悔むと云う改む心さるなり身ハや
 の事にやれて耳ハやの語のとき時ハいつ智
 け開て明ふやうの時なり譬ハ房舎の中に
 坐し四面ハ壁牆と云蔽るが如きなり
 馬援兄子嚴敦並喜譏議而通輕
 俠容
漢の馬援ハ伏波將軍と名高人なり
 兄子の嚴敦といふハ此時議論と云う
 人の非と見ざる譏て評議といふ常ハ俠客
 のものと交義と結しう皆輕薄の徒なり

援交趾在書
還て之と誠うて
曰く吾汝の曲言
人の過失と聞
父母之名と聞
如て耳聞
得可く口言
と得可く不と欲
す也好て人の長
短と議論
に正法と是非
此吾大に惡
所也寧死
子孫此行有
聞と願不也
龍伯高敦厚
調慎口無謙約

援在交趾還書誠之曰吾欲汝曹聞
人過失如聞父母之名耳可得聞口
不可得言也好議論人長短妄是非
正法此吾所大惡也寧死不願聞子
孫有此行也
誠めてや汝同曹の後に謹
過失と聞我父母の事と聞わんて口に
言ふべし人の長短と議論するに國家の
正法と評判して是非とを言ふに惡嫌との
み肉縁子孫に之の行あるを聞る龍伯
高敦厚周慎口無擇言謙約節儉廉

節儉廉公
威有吾之愛
之と重ず汝
曹之に效と
願
杜季良豪俠
義と好人の
憂と憂人之
樂と樂て清
濁失所無父
の喪に容
と致て數郡
畢至五之と
愛と重ず汝
曹之に效と
願不也
伯高に效て
得不得不
猶謹教之士
所謂刻鵠
不成尚類鶩
者

公有威吾愛之重之願汝曹效之
名高龍氏に伯高といつて身持敦厚周
慎と一言口不出るを擇て理やく廉公
て威光あり吾つて重愛杜季良豪俠好
義憂人之憂樂人之樂清濁無所失
父喪致客數郡畢至吾愛之不願汝
曹效也
又杜氏に季良といつて豪俠義
理と好む人の憂と憂人の樂と
數郡の人きり至るを語る此人と重愛
此人といふ人なり同曹也伯高不得猶爲
謹教之士所謂刻鵠不成尚類鶩者

者也。李良に效て得ず不陥る天
下の輕薄の子を爲
所詭虎と畫て成
不反て狗に類する
者也

也效李良不得陷爲天下輕薄子所
謂畫虎不成反類狗者也

謹敷る士と云ふは世間に所詭虎と云ふは李良
鳥と刻て成るんど云ふて驚くことなり李良
の如く一際あつて心の烈操多所と效えんとて輕薄
の場に陥入る是れ世に云ふ虎と西がんと却て
狗に類する

漢の昭烈將終
終に將に後主
に勅めて曰く惡
の小を以て而
善の小を以て
而して爲不勿
二度

○漢昭烈將終勅後主曰勿以惡小
而爲之勿以善小而爲

劉禪、勅めの遺言めせたる凡人の心して惡
好くといひ遂にその理の善惡のまゝな
る、是れ惡くするといふの心とて致さる

○諸葛武侯戒子書曰君子之行靜

以修身儉以養德非澹泊無以明志

非寧靜無以致遠夫學須靜也才須

學也非學無以廣才非靜無以成學

武侯の諸葛孔明なり。子孫を戒めたる書に曰く
君子の行は靜なりと儉なりとふり心躁るては
身修まりがたし人情驕るて德養ひがたし
澹泊するては心向ふも明ふも寧靜しては遠
くも真の才とより立ぐ

能研精險躁則不能理性年與時馳

諸葛武侯子と戒
し書に曰く君子
之行靜以修身
修身儉以養德
非澹泊非以明
志無寧靜非以
致遠致遠無夫
學也才須靜也
才須學也非學
無以廣才非靜
無以成學也
須二度
惰慢なれば則ち精
と研し能ふ不險
躁なれば則ち性

時與馳意歲與
去遂に枯落と
成る窮廬に悲歎
す將復何ぞ及
ん也

柳北嘗て書きて著
し。其子弟に戒めて
曰く。名と壞已と
災ひ。先と辱し
る。家と喪。其失
尤大。三者五。宜
く深之と戒。宜

其その一いつ自より安逸あんいと
求もと。澹泊たんぱくと甘あまずる

し摩サカ苛カくク已ヤと
利リて人ニの言コトと
恤ホシ不レ於ニ

其六二。儒術と知不

古道と愧ぶ不。前
經に慚而耻不當

世を論而頗と解
身既に知と寡うて
人の學有と惡

其一二已に勝者へ之と

厭^{いと}ひ^ひく^く人^{ひと}を^を使^{つか}ふ^ふ者^{もの}之^のを^を
と^とせ^せる^る唯^{ただ}戯^{あそ}談^{たん}と

樂て古道きうだうとおもひて莫もく
人之善ぜんと聞きくハ之これ
嫉しやう人之惡あくと聞きくハ

之と揚頗辟に浸漬ひた
し、ヒキギ焚義を銷刻さうこく

養しやう何なん死しん
善ぜん徒た在ざいん
廟ぼう

經史余帙

意與歲去。遂成枯落。悲歎窮廬將復
 何及也。
 心惛慢。力乏。理と精研。くやう。及び。復
 年。齡。と。時。節。く。矢。の。如。く。不。過。馳。の。意。の。く
 歲。月。に。後。つ。る。枯。落。と。り。て。困。窮。の。廬。に。悲。歎
 及。ず。と。い。ふ。べ。し。

○柳玼膏著書戒其子弟曰壞名災
已辱先喪家其失尤大者五宜深誌
之唐の柳玼といふ人子弟の爲に家の訓とて
て曰く凡て名と下し壞已々身に災過と仕出
一先祖と辱しめ家と失ふものありその
品よ五ヶ条あり、誌して深くいしむべし
其一自

求安逸靡甘澹泊苟利於己不恤人

言コト 一ヒト 条ジョウ 八ハチ 常ジョウ に 安ヤス 逸エキ と 好ヨウ る 利リ 欲ヨク と 事コト 一ヒト 鷹トウ 胆タン と
と 非ヒ ず て 人ジン の 已ヨリ と 評ヒョウ 判パン 一ヒト 言コト 一ヒト 氣キ は け

其不知儒術不悅古道

情前經而不耻論當世而解顧身既

寡知惡人有學
二に古への道儒書の術を覚
びて前の経に懽はい

常世の浮説と願にうけて無知文盲
身となり人の學問あるといふ西悲む
其二勝已

者厭之。佞已者悅之。唯樂戲談莫思。

古道聞人之善ニ嫉テハ之ヲ聞人之惡ニ揚テ之ヲ

浸漬頗僻銷刻德義簪裾徒在厮養

何殊ナニト勝カチる人ひとと厭イヤむ人ひとに善ヨシくわれわれば嫉ヤミまうく惡アクく

大學卷之五

其四優游と崇好
麴蘖と耽り
嗜杯と嗜事と
て高致と爲事と
勤ると以て俗流と
爲之に習は荒
易覺む已
悔難

其五名官に急
いて權要に匿
一資半級或
之と得と雖
衆怒群猜て存
余見名門右族と見
に祖先の忠孝

勤儉に由て以て
之と成立せし
莫子孫の頑率
奢傲に由て以て
之と覆墜せし
莫成立之難
天に外か如覆墜
之易し如燎毛言
如之と言はれ
痛し爾宜
骨に刻直宜度
范魯公質宰相
爲從子杲嘗
て奏て扶と遷
乞と求質詩
と作て之と曉
其略に曰く

とへ揚てそと願僻にいと浸漬て心の徳義の銷
刻らぬふの人のたぐ冠とてふき簪とてふ一
引て高位にあつて勵養のめれに殊る
其四崇好
優游耽嗜麴蘖以嗜杯爲高致以勤
事爲俗流習之易荒覺已難悔
遊々として崇好と麴蘖に耽り嗜と數杯と傾
け杯と高致と職事の勤と俗流と
て心荒て善事の習がて
たふ心に覺て悔てふ
其五急於名宦
匿近權要一資半級雖或得之衆怒
群猜鮮有存者
一資半級と得てふ傍輩の猜
余見名門右

族莫不由祖先忠孝勤儉以成立之
莫不由子孫頑率奢傲以覆墜之成
立之難如外天覆墜之易如燎毛言
之痛心爾宜刻骨
余の父家と覆墜し大く子孫の頑率奢傲
に起る何事にも成成立し難難覆墜し
と燎より速い何事にも成成立し難難覆墜し
痛し爾等骨に刻て
范魯公質爲宰相從子杲嘗求奏
遷秩質作詩曉之其略曰
宰相となりし時杲の從子に杲といふが自身の
食禄官秩と昇進せんそ天子へ奏聞せんそ

戒爾學身之立也立身莫若先孝弟孝弟者怡怡奉親親長に奉
學に孝弟を先
す。小若其太。怡怡
親長に奉
敢驕易と生で不
戰戰復兢兢造
次必
戒爾學干祿莫
勤道藝嘗聞諸格言
學而優則仕
聞。學て而
優。人則仕。人
の知不と患不惟
學の至不と患心

戒爾學身之立也立身莫若先孝弟孝弟者怡怡奉親親長に奉
學に孝弟を先
す。小若其太。怡怡
親長に奉
敢驕易と生で不
戰戰復兢兢造
次必
戒爾學干祿莫
勤道藝嘗聞諸格言
學而優則仕
聞。學て而
優。人則仕。人
の知不と患不惟
學の至不と患心

戒爾學身之立也立身莫若先孝弟孝弟者怡怡奉親親長に奉
學に孝弟を先
す。小若其太。怡怡
親長に奉
敢驕易と生で不
戰戰復兢兢造
次必
戒爾學干祿莫
勤道藝嘗聞諸格言
學而優則仕
聞。學て而
優。人則仕。人
の知不と患不惟
學の至不と患心

禮自界而尊人先彼而後已相鼠與
 弟鳴宜鑑詩人刺禮恭の不及と過の
やに致べ
經。相鼠の
と讀て知べ
戒爾勿放曠放曠非端
士周孔垂名教齊梁尚清議南朝稱
八達千載穢青史
大聖人君臣父子各々の名教と垂
代。清議と尚
戒爾勿嗜酒狂
藥非佳味能移謹厚性化爲凶險類

の如く為古今傾敗する者歴歴として

記可し戒し勿し多言し衆の思ふ所を苟も樞機を

慎みまし災厄を此に從ひ始め是を非を毀る譽をの間適に身に

の累を爲す爲すに足る世と舉げては交游を

と重し金蘭の契を結ぶ擬し風波に當時に起る

所以に君子の心を注す王に淡く水の如く

古今傾敗者歴歴皆可記酒心と狂す

勿多言多言衆所忌苟不慎樞機災味とつづつに盡く厚性實とく凶險

厄從此始是非毀譽間適足爲身累易し古今家と傾敗と歴歴として人の記す

心注王淡如水世の人とく俄に交游と結

金蘭の如く堅く契と容易と心と

契怨容易生風波當時起所以君子生とやと依て君子ハ注とて水淡とて

舉世好承奉昂昂增意氣不知承奉

者以爾爲玩戲所以古人疾遽條與

戚施又今の世舉に身と奉養とと人の

舉世重游俠俗呼爲氣義爲

人赴急難往往陷囚繫所以馬援書

殷勤戒諸子又游俠と好て世俗の氣義と

舉世賤清素奉身好華侈肥馬衣輕

世と舉げては清素と

と賤し身に奉じに

世と舉げては承奉と

と好む昂昂と

音の意を氣と増し知る不し

兼に奉じする者爾と

以て玩ぶ戲を爲すと

所以に古人の疾し遽に條と

華侈と好。肥馬
みて輕裘と衣揚
揚して閭里と
過市童の隣
還て識者の鄙と

我本羈旅の臣
堯舜の理に逢
に遭り位重
才不充。戚戚
深淵と薄氷與
之。路で唯墜と
恐。爾の曹當に
我と憫む當罪
庶と増使。勿

門と開て蹤跡
歛首と縮て名勢
居難。畢竟何
時に足。物盛
則ら必衰。表
隆とあれ還替
有。速成堅牢
や。亟走多
顛躓す

灼灼と園中の花
蚤發て還先萎遲
遲り間畔の松
鬱鬱とて晚翠と
令。命と賦。疾徐
有。青雲ハガ致難
寄語て諸郎に謝
す躁に進徒為耳

裘揚揚過閭里雖得市童憐還為識

者鄙今の人々ハハ華侈と好て清素ヤリと賤ミ

輕裘とあれて。夏ハ越後久ハ羽二重と著。心揚々

にやりて閭里と過行りれり。市童のやうなり。知識者ハハ鄙ミ

我本羈旅臣遭逢堯

舜理位重才不充戚戚懷憂畏深淵

與薄氷蹈之唯恐墜爾曹當憫我勿

使増罪戾魯公云ううう詞ヤリ我ハ本羈旅

御代に遭て當今身重位ハあれど。智不充也

之。戚々憂畏とぞ。た。深淵薄氷に在

に罪戾と増し。やうに。閉門歛蹤

跡縮首避名勢勢位難久居畢竟何

足恃物盛則必衰有隆還有替速成

不堅牢亟走多顛躓爾曹つゝに要用の外ハ

人の毀やうに蹤跡と指。ね。工夫と。無事に

前と縮て名聞威勢とあけ。勢位ハ久。無事に

は。隆盛やれ。是非に衰替なり。時。世の

に。速に成。堅牢や。亟走多。顛躓。やうに

灼灼園中花蚤發還先萎遲

遲間畔松鬱鬱含晚翠賦命有疾徐

青雲難力致寄語謝諸郎躁進徒為

耳春に灼々園の花ハ蚤發萎く。遅。間畔に生。枝ハ

鬱々たる千年の晩翠と含真その如く、人の禍福
 吉凶ハ始より天の命、數定まり賦て疾あり餘のみ殊に
 於るは青雲人、人なりて知べし、かやうに奇語
 として諸郎の利欲の望に謝し、返くも躁して
 進み、徒為と
 さるるべからず

康節邵先生子孫
に戒めて曰く。上品之
人の教不て而して
善なる。中品之人の
教て而して後に善ま
る。下品之人の教
て亦善ならず不教
不て而して善なるハ
聖に非で而して何。
教て而して後に善
なるハ賢に非で而
して何。教て亦善

○康節邵先生戒子孫曰。上品之人
不教而善。中品之人教而後善。下品
之人教亦不善。不教而善。非聖而何。
教而後善。非賢而何。教亦不善。非愚
而何。邵康節先生の曰く、教やくして善き人上品
のひとて賢人なり。教ても善く
いふより下品のひとて愚者なりとて
中品のひとて賢人なり。教ても善く
いふより下品のひとて愚者なりとて

是知善也

而して何^{なんぞ}に非^{あら}ず

者吉之謂也。不善也者凶之謂也。

是に知善者吉之
謂也。不善者凶之
謂也。

考かん知し。善ぜんとんきん士しのひと多おほし。吉きち也なり者もの曰い不ふ觀くわん非ひ

吉者目に非禮之
色と觀不耳に非
禮之聲と聽不口
に非禮之言と道
本^ホち^チに非禮之地
と踐^ミ不^ス人善^ニに非
礼^ニ取^リ不^ス賢^ニに親
^レ之^ヲ禮^ニに就^グ如^ク
惡^ニと避^ク如^ク蛇蝎と
畏^ル如^ク或^ハ之^ヲと
吉人^ニと諱^ム不^ス曰^ハ
也^也則^チ吾^ハ信^ス不^ス

禮之色耳。不聽非禮之聲曰不違非
禮之言。足不踐非禮之地。人非善不
交。物非義不取。親賢如就芝蘭。避惡
如畏蛇蝎。或曰。不謂之吉人。則吾不
信也。吉人の行狀はへうとくかうはふて目に現るに
聴口に詔足に踐はつてても非禮やういふに
いへば蛇蝎とてしむるやうか。如くされしやうの人のたう
吉人といふ人ありければ吾輩信べうとやういふ

之と策す諸君
何ぞ丑子と為不

いふく 君子とすむるも又可なり、
いふく 父母の好むにて郷人も榮むるに思ふ何ゆへ君子とるがや

又曰く其六善なり
所といふ其六善あり

又曰。言其所善。行其所善。思其所善。

所^{ところ}と行^いひ其^{その}六^む善^{ぜん}口^くの
所^{ところ}と思^{おも}ふ。此^{この}の如^{ごと}く

如此而不爲君子未之有也言其不

く
て而て君子
爲不の未之有

善行其不善思其不善如此而不爲

未也其不善と
言ひ其不善と行

小人未之有也
ト
サレニ
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

此如て而て

常に心にありて皆善なりと君子とや
べし此二三逆違ふべし小人と云ふものなり

水人爲不采
之有未也

○胡文定公與子書曰。
胡文定公へ宋朝の大儒たり。子孫

胡文定公こぶんていこう子こに與あはる

に示しと
まうらん
立志以明道希文自期待
志
向と

立^たて^ると明^めい道^{みち}希^{まれ}文^{ぶん}と
以^もて自^{みづか}期^き待^{たい}し

立^たち^まふ^ふ明^めい^い道^{だう}と希^き文^{ぶん}と兩^{りやう}先^{せん}生^{せい}にありた^とと
期^き待^{たい}め^める^る大^{だい}儒^{にう}と忠^{ちゆう}臣^{しん}とや^やる^る也^{なり}なり

心と上りたハ忠信
不敷と以て主

以忠信不欺爲主本

本と爲。已と行
ハ端莊清慎。以

行已以端莊清慎見操執

古從聖賢這裏
的工夫做得其
忽忽にす可んや

古靈の陳先生僊
居令爲其民に
教て曰く

吾民と爲者ハ父
ハ義に母ハ慈に兄
ハ友に弟ハ恭に子
ハ孝に夫婦ハ恩有

男女別有

子弟有學有鄉閭
禮有

貧窮患難ハ親
戚相救

婚姻死喪隣保
相助

農業と墾と無

盜賊と作と無暗

博と學と無爭

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

訟と好と無

可忽乎
從古聖賢自這裏做工夫其
忽たやんやんがふべしと忽てふべし

古靈陳先生爲僊居令教其民曰

吾民と爲者ハ父義母慈兄友
兄弟有學
道と學べ

貧窮患難親戚相救
長と敬畏の
禮有るべし

婚姻死喪隣保相助
ひく等のつたハ親
戚たがふ相救ふ

農業無作
つらうとふん又死喪等の事ハ
近隣の人々たがふ相助あ

盜賊無學賭博無好爭訟
盜賊と防ぎ公事
爭訟と好ま

無以惡陵善
陵と無
争訟と好ま

無以富吞貧
貧と富
争訟と好ま

行者讓路耕者讓畔
禁ズ

負戴於道路則爲禮義之俗矣
路と由づり田地と耕るもの畔界と由づりふん
負戴するもの重きと脊に負かふふ戴くもの

禮義ある民とつふなるべし

禮義ある民とつふなるべし

禮義ある民とつふなるべし

禮義ある民とつふなるべし

禮義ある民とつふなるべし

禮義ある民とつふなるべし

禮義ある民とつふなるべし

禮義ある民とつふなるべし

右立教と廣む

右廣立教

教にあり立教の意と廣む

小學卷之五終

小學卷之六

司馬溫公の曰く凡諸の幼事無大小

事大小と無事行ふと得と母必家長に次稟せ凡子父母之命と受て必籍記して而之と佩時に省を而して速ふ之と行ふ事畢と命を返す

或ハ命する所行ふ可く不者有る則ち色と和け聲と柔ふ是非利

司馬溫公曰凡諸幼事無大小母得專行必咨稟於家長凡子受父母之命必籍記而佩之時省而速行之事畢則返命焉

司馬溫公の語なり凡て幼壯父母の命なり籍記て身に佩ちて省て速に父母に返命し用事或所命有不可行

者則和色柔聲具是非利害而白之待父母之許然後改之若不許苟於

害之具ありて而之と白く父母之許を待て然して後之と改め若許不苟事に於て大に害無者亦當に曲に従ふ當其父母之命と以て非とて而て直に己が志を以て行ふ執所皆是之と雖も微不順之子と爲況や未必ずしも是と未乎（當）（未）（兩度）

横渠先生曰く
親に事て

悦びれ不く有者
父頑に母置に人
情に近く不爲
若く中人之性の
若く其愛惡理
と等するは無
若く必く姑之に
順へ

親之故舊喜
所の若く當に力
と極て招致當
賓客之奉當
に力と極て營辦
當務て親と悦
爲（當）（二度）

家之有無と計
可く然とて又

事無大害者亦當曲從若以父母之命爲非而直行已志雖所執皆是猶爲不順之子況未必是乎（命）（行）

此れがふふ和ふ白あがくこれに利あり害道理
とて父母の許を待て然して後之と改め若
又許を待て然して後之と改め若
萬一父母の許を待て然して後之と改め若
たたく是とて當たりとて不順なりとて賤む
りて況て是とて當たりとて論うれとて
て、田舎ふあれと繁華の都とてはがやうの心持とてん
ものすくれ、嫁とては他家へゆくもの別て、こふふ
不孝不埒の事とて

○横渠先生曰く舜之事親有不悦者

爲父頑母嚚不達人情若中人之性

其愛惡若無害理必姑順之（横渠曰）

舜の大孝なりと兩親に喜悅と受ざるは父母
の頑嚚なりとてふなりとてあまりに人情にそわり
ゆふ理に空しくするは命に順ふるなり若親

之故舊所喜當極力招致賓客之奉

當極力營辦務以悅親爲事（親の故舊）

人々との賓客等あつて招きよめて餐應の營辦
と致さる何の務にやとて兩親の喜悅を致す

不可計家之有無然又須使之不知

其勉強勞苦苟使見其爲而不易則

須く之を以て其
勉強勞苦を以て知
不使須苛其為
而之易く不と見
て使則ち亦安
せ不須(西渡)矣

羅仲素論瞽瞍底豫
と底而天下之父
子為者定と云
と論て云く只
天下に不是底の
父母無が為なり

了翁聞て而
之と善くして
曰唯此の如に
て而後天下

下之父子為
者定彼臣其
君と弑し子其
父と弑も常に
其不是の處有
と見に始る耳

伊川先生曰
病て床に卧と
之と庸醫に
委う之と不慈
不孝に比す親
に事う者ハ亦
醫と知んある可
く不

亦不安矣
人用の有と無と計り
たふあふべし
強く人々苦勞の
事の爲不易と知
母のこころ安
くばるべし

○羅仲素論瞽瞍底豫而天下之為

父子者定云只為天下無不是底父

母
羅仲素論瞽瞍底豫意と云く只為天下無不是底の父母無が為なり

了翁聞て而之と善くして曰唯此の如に

此而後天下之為父子者定彼臣弑

其君子弑其父常始於見其有不是

處耳
了翁論て云く只為天下無不是底の父母無が為なり

○伊川先生曰病卧於床委之庸醫

比之不慈不孝事親者亦不可不知

醫
伊川先生曰やうの今日父母床に卧たふは

庸醫に委う之と不慈不孝に比す親に事う者ハ亦醫と知んある可く不
聞あつと善くして道にまゐるべし又自身も醫
術と云ふものけぬ不孝なり食事等の能を知
かゝるやうな起るは醫藥の論と立やうて
療治にうごかう起るは道にまゐるべし

横渠先生嘗曰事親奉祭豈可使
祭に奉く豈人
に之と爲使可
んや

伊川先生曰冠昏喪祭禮之大者
冠昏喪祭禮
之大人者
今の人都在
理會せ不豺獭
皆本と報ずる
と知今士大夫の
家多此に忽る
奉養に厚し而
先祖に薄し
甚不可也

某嘗て六禮の
大略と脩る家
に必ず廟有り
廟に必ず主有
月朔に必ず
新しき薦時
祭に仲月と
用冬至と始
祖と祭立春
に先祖と祭
秋の禘と祭
日主と遷て
正寢に祭凡死
に事之禮ハ
當に生に奉ず
者より厚す當
於

○横渠先生嘗曰事親奉祭豈可使
人爲之
大に道理に
うより

○伊川先生曰冠昏喪祭禮之大者
今人都不理會豺獭皆知報本今士
大夫家多忽此厚於奉養而薄於先
祖甚不可也
某嘗脩六禮
後と忽るふつと非道なり

大略家必有廟廟必有主月朔必薦
新時祭用仲月冬至祭始祖立春祭
先祖季秋祭禘忌日遷主祭於正寢
凡事死之禮當厚於奉生者
冠昏喪祭と郷の飲酒と大夫士相見の六禮
と脩成て大畧とつとけり家ハ先祖と祭廟所
ありもの廟中ハ神主とつとけり朔日とに新物を
薦四時の祭に仲月と用冬至ハ十一月の中二陽
の生する日なり依て宗族の大始祖の神と祭
やうり立春ハ物の生する月サレハ我先祖と祭
高祖より前々まで祭とつとけり季秋ハ物の成
就の月サレハ父と祭とつとけり禘ハ父の廟サレハ今ハ先
祖と一所より正當の忌日ハ正寢の真中へ請
く祭やうりとなく生の世よりハ禮敬と盡くつと

人家能此等
の事數件
存得^{たう}幼者^{わう}と
雖^{いふ}に漸^{しだ}に禮義^{れいぎ}
と知使可^し

神明しんめいやうぶ
ゆゑなり
人家能存得此等事數件雖
幼者可ト使レ漸ム知ラ禮義レ
家々いへはれ件けんく
理會りかいのうゝな幼少ようせう
より禮義れいぎの事ことと
うゝなうゝなうゝ

司馬溫公曰く
冠者成人之道
也成人者將に
人の子と爲人の
父と爲人の臣と
爲人の少と爲者
者行ひと責と將
也將に四の者之
行ひと人に責と將
其禮重て不可
與將に於

○司馬溫公曰冠者成人之道也成人者將責爲人子爲人弟爲人臣爲人少者之行也將責四者之行於人其禮可不重與始冠の禮ハ成人の禮也人少者之禮ハ成人の禮に比して輕薄なり人の子弟臣下少者之責ベシ冠禮役ヲ知ラヘシムルハ重シクシテ禮ヤシクヤ冠禮之廢久矣近世以來人情尤爲輕薄

人情^に尤^も輕^く薄^くなりと爲^す子^をと生^はて
 猶^も乳^をと飲^みに已^ま
 に巾^を帽^をと加^へ官^を
 有^り者^はハ或^はハ之^を
 爲^すに公^の服^をと
 製^して而^{して}之^を
 と弄^ぶるふ十^の歳^を
 と過^すまじ猶^も總^て
 角^のすの者^は蓋^も鮮^く
 彼^の責^をに四^のの者^は
 之^の行^をと以^てすくも
 豈^か能^く之^をと知^るヤ
 故^にに往^て往^て幼^く自^ら
 長^にに至^ると愚^い心^を駭^か
 一^の如^く成^る人^の之^の道^を
 と知^る不^しに由^る故^に也

生子猶飲乳已加巾帽有官者或爲
 之製公服而弁之過十歲猶總角者
 蓋鮮矣彼責以四者之行豈能知之
 也世ハ其禮處ニテ人情モ輕薄ニツキ乳子
 の時トシテ元服ニ用ヅル巾帽ト加メテ土官ニハ
 公服（公服）ヲシテ製作テ弄翫（弄翫）スルノ且十歳ニ至ル
 至ハ總角（總角）ニツキテ一ノ鮮（鮮）何トシテ成人ノ
 義理（義理）トモヤ故往往自幼至長愚駭如
 一由不知成人之道故也（人ハ往往）
（幼少ニ愚駭）
 冠然世俗之弊不可猝變若敦厚好

古禮二十有五而冠冠すと稱すと雖然然と世俗之弊に弊に變ず可不敦厚古の好之君子の若ハ其子年十五以上能孝經論話に通粗禮義之方を知と侯然然と之に兎セ六期其美矣

古之君子俟其子年十五以上能通
 孝經論語粗知禮義之方然後冠之
 斯其美矣
 子の年十五六にして孝經論語を粗く知るるに當りて之を冠す
 禮義の方を知るに始冠といふなり
 風俗の美
 古者父母之喪既殯食粥齊
 喪中の禮
 食水次不食菜果
 喪中の禮

古者父母之喪既殯食粥齊

衰疏食水飲不食菜菓

喪中の禮
衰の服
喪の禮
衰の服

古者父母之喪
既殯^ハ殯^ハ以^テ強^ク
と食齊衰^ニ疏食^ヲ
水飲^シて菜果^ト
食セズ

の服に著するなり。づきし三年の服なり。殯とて棺に入て西階の上に置なり。其入棺するの三日ハ食事とつとまじ。三日のうち親類のすくつかかりて服と食するなり。外の飲食ハつとまじ。又齊衰ハ母の爲に三年服す。ズミを除て。只一年服するなり。疏ハミ食と水とを飲ばなり。ふく他の飲食ナミ知。野菜ナミ。ふく菓物ハ

父母之喪に既
に於て哭して

食シヨウ法ホウより
父母之喪既虞卒哭疏食水飲

疏食水飲
菜菓と食せ

不食菜菓

三ヶ月より葬て後の祭と虞とハ
虞の後の祭と卒哭とハ是よりハ

親とづれはづるに哭し今日と卒の朝
 燈をりと定む食物ハナシをなかり

期而小祥食菜蕞。又期而大祥食醯醢。中月而禫。禫而飲醴酒。始飲酒者。

先飲醴酒始食肉者先食乾肉一期と小祥の

と飲^ハ始^ハて酒と飲^ハ
者^ハハ先^ニ鹽酒と飲^ハ
始^ハて肉と食^ハう者^ハ
ハ先^ニ乾肉と食^ハす
古^ノ人^ハ張^ヲを居^テ
敗^レく公^ハ歟^ハとて

祭まつりといふは如ごとく野菜木菓もくくわと食たふ。三年さんねんと大祥たいしやうと
 といふ醢かい醬じやう等らと食たふ。是こゝ二十にじふ五ごヶ月げつなり。三年さんねんの喪さうつゝ
 るなり。又また一いつ月げつと中なかつて禫たのの祭まつりといふ二十にじふ七しちヶ月げつなり。肉にく
 と食たふと乾ひ肉にくなり。喪さうちなりとれども俄にに美味みづかみ
 食たふふあり。古ふる人居に喪さう無な敢て公然こゝろ食た肉にく飲の

飲者無

漢の昌邑王昭帝の喪に奉道

晉阮籍の喪に居て禮無

俗に敗之人長

酒者酒肉をたぐふ漢昌邑

王奔昭帝之喪居道上不素食霍光

數其罪而廢之漢の昭帝崩りて東宮

晉阮籍時都に上りて道する肉を食する

負才放誕居喪無禮何曾面質籍於

文帝坐曰鄉收俗之人不可長也晉の

阮籍俗に敗之人長

放誕なり母の喪中にありて酒肉を食して

禮を失ふこと同く曾の文帝の臣に何曾といふ人

因言於帝曰公方

以孝治天下而聽阮籍以重哀飲酒

食肉於公坐宜擯四裔無令汚染華

夏因て帝に奏するハ君ハ今方に孝を以て天

下とせしめりやと云ふ阮籍はかゝる重き

○宋廬陵王義真居武帝憂使左右

買魚肉珍羞於齋內別立廚帳會長

史劉湛入因命賜酒炙車螯南朝の武帝

時御子廬陵王義真戒なりと云ふ別は庖厨と云ふ

て異事なり是
 流俗の弊其来
 甚近今之士
 大夫喪に居て
 肉と食と酒と
 飲と平日に異
 無相從て
 宴集し醜然と
 愧と無人も
 亦恬也怪と為
 不禮俗之壞
 習て以て常と為
 悲夫也
 乃鄙野之人
 に至て或ハ初喪
 未飲未親賓
 則酒饌と齋
 往く之と勞

也今之士大夫居喪食肉飲酒無異
 平日又相從宴集醜然無愧人亦恬
 不為怪禮俗之壞習以為常悲夫
 五代の時人々異なりけり見ゆけ
 流俗の弊つるに只今もハ士
 大夫人々酒宴肉食とて常の如く醜然
 實に禮義やぶる常乃至鄙野之人或初
 喪未飲親賓則齋酒饌往勞之主人
 亦自備酒饌相與飲啜醉飽連日及
 葬亦如之
 乃鄙野之人ハ初喪に
 未飲未親賓酒饌とあり

主人も亦自
 酒饌と相與
 飲啜醉飽
 連日及て
 亦之の如く
 喪に樂と作て
 以て尸を娛む
 殯葬に及て則
 車と導び而
 號泣て之に隨
 亦喪に乘せ即
 ち嫁娶する者有
 意習俗之變難
 愚夫之曉難及
 凡父母之喪に

尸及殯葬則以樂導輜車而號泣隨
 之亦有乘喪即嫁娶者噫習俗之難
 變愚夫之難曉乃至此乎
 尸者と云ふは、殯葬の輜車、引くも
 樂とあり、又その中に號泣あり、是の
 禮に、餘ハ無禮、人の中にも喪中に依
 て相續ヤル者、嫁娶と云ふは、世の
 習俗の變り、致すも、愚夫ハ、凡居
 父母之喪者大祥之前皆未可飲酒
 食肉若有疾暫須食飲疾止亦當復

居者ハ大祥之
前若未酒之飲
肉之食ナ可未
若疾有暫須
食飲ヲ須
疾止亦當に初
に復當小々素食
咽に下之能不久
而羸憊疾と
成之と悲者之君
肉汁及脯醢或
肉少許と以
其滋味と助可
恣に珍羞盛
饌と食及人
與燕樂ナ可
不是則ち衰麻
と被雖其實

初必若素食不能下咽久而羸憊恐
成疾者可以肉汁及脯醢或肉少許
助其滋味不可恣食珍羞盛饌及與
人燕樂是則雖被衰麻其實不行喪
也凡て兩親の喪中大祥のころハ酒肉ハ禁制
ナレバ一病疾にあらざる食ナレバ一平復セバ本の
つらさハ一素飯と食して咽に通へる羸憊
疾ハ一出ゲとあらざる肉の汁ハ脯醢
食ナレバ一少許の滋味とせしめたり
に珍羞の酒饌とせしめたりたゞいなく衰麻著
とすいゝ實ハ喪中の事
氣既衰必資酒肉扶養者則不必然
唯五十以上血

喪行ナレバ
唯五十以上血
氣既に衰必
酒肉に資て扶養
然不耳其喪に
居て樂と聽及
嫁娶する者ハ國
に正法有此に復
論セバ
父母之喪に中
門の外に撲陋
之室と擇て夫
之喪次と為轉
衰之苦に寢嵬
之枕と經帶と
脱ナレバ人與坐セ
不

耳其居喪聽樂及嫁娶者國有正法
此不復論酒肉とらるるに身と扶や
中門外擇撲陋之室為丈夫之喪次
斬衰寢苦枕塊不脫經帶不與人坐
焉父母の喪中ハ中門ハ大門との間に撲陋
之室とせしめ丈夫の喪次室とせしめ
父母ハ斬衰の衣服とせしめ
枕として親の身の草露の間に在る
首經と麻とを首にかけ
要經と帶とを腰にかけ
婦人次於中門之内別室撤去

婦人へ中門之内の別室に次いで帷帳衾褥華麗之物と撤去男子故無べ中門不入不婦人輒男子の喪次に至るを得ず

晋の陳壽父の喪に遭疾有婢として藥と丸使客往て之と見郷黨以て賤議と為是う坐に沈滞坎珂身終嫌疑之際慎不うる可う

帷帳衾褥華麗之物男子無故不入中門婦人不得輒至男子喪次婦人へ別室に居て帷帳衾褥の華麗を去りて之を撤去するは男子の故なり

晋陳壽遭父喪有疾使婢丸藥客往見之郷黨以為賤議坐是沈滞坎珂終身嫌疑之際不可不慎代の

時陳壽といへり父の喪中疾ありて婢女に藥を丸とせしめて客一人一人を欺て之を欺て之を欺て終身あつて沈滞坎珂て世に出るなれば嫌疑

父母之喪に不當出若為喪事及有不得已而出若則乘樸馬布裹鞍轡

父母之喪不當出若為喪事及有故不得已而出則乘樸馬布裹鞍轡凡て喪中より他出るべしとせしむるは喪のついでに又出るべしとせしむるは樸馬に乘りて鞍轡を裹ふ

世俗浮屠の誑誘と信し凡喪事有佛に供僧に飯せしむる無二云死者の為に罪と滅し福と資天堂に生て諸の快樂と受使為不若の必す地獄に入て到焼春磨せし諸

世俗信浮屠誑誘凡有喪事無不供佛飯僧云為死者滅罪資福使生天堂受諸快樂不為者必入地獄到焼春磨受諸苦楚近來浮屠に誑誘するものありて死者の罪をわたりて天堂へ生じて福に供養と為し死人の罪とわたりて地獄に焼春磨と為す

の苦楚と受と殊て知不死者形既朽滅
 神已飄散雖有剉燒春磨且無所施
 又況佛法未入中國之前人固有死
 而復生者何故都無一人誤入地獄
 見所謂十王者耶此其無有而不足
 信也明矣

是と以て信するも一〇たつと以て善にす
 國所なりとて惡いやらんとされ道理と繪圖又ハ
 元より此と論じてられ教はた人々を信せしめ
 佛智のつくりたるを始めて佛法と信ぜし人ハ唐土
 ハ楚王英 天朝ハ馬子なり英ハ謀叛とて馬子ハ
 君と弑し奉つる君と弑するの濫觴なり兩國に
 夫とて數百年の間の人々ハ信じて苦樂を佛
 傳する目單備に佛と誹するふありたてハ佛
 學と學して後どののふとて或は信ト又ハ魔ト
 に知の僧尼佛學とせし佛の理の高場所と
 ちとて雷同の說よりやみて佛に入らざるハ貧
 窮にたるなり佛に入らずハ不幸の至
 出會しより佛に入らずハ寵愛する子と死すハ佛
 に入らずハ俄に名利と思ふなり願と起たざる

如來の法の高き佛理として、脇道に入り入に依
て右の仕合せなり。○天然ハ西域よりして、居所と天
法度と犯すの地な堀て入と地獄と名づくるなり。又
土の土牢、石塊、漬の類なり。閻羅十王ハ司刑獄
の官名なり。春磨判焼びくす、異なり。天
朝、唐土大抵同例の事なり。夜叉羅刹國等
ハ近鄰の夷ふなり。罪あるものを放逐たぐり
是等書として、知るなり。又説法と立て
られ世に死して後、別にかきく國へゆくなり。
説くは、土の僧の
一ツの秘事なり。

顔氏家訓に曰
吾家巫覡符
章言議と絶
妖妄所なり
妖妄と爲し勿
於

○顔氏家訓曰、吾家巫覡符章絶於
言議、汝曹所見勿爲妖妄。
北朝の臣に
顔之推と一
人の家法の訓に、吾家巫覡符章絶於言議、汝曹所見勿爲妖妄とあり。又一切の妖妄言議を絶する。

見聞の如く、子孫へ示し、あま

伊川先生曰、人無父母、生日當倍
日、人父母無
ハ生日に當に
悲痛と倍當
更に安んず酒
と置樂と張て
以樂と爲に忍
具慶の者の若
可なり當に渡
可

○伊川先生曰、人無父母、生日當倍
悲痛、更安忍置酒張樂、以爲樂、若具
慶者可矣。
父母の存生の時と
己の生日の時と
昔の日のやと、悲痛と倍當と、酒と張樂と、置酒張樂と、忍置酒張樂と、具慶の者の若可なり。

呂氏童蒙訓
に曰、君に事
親に事、如官
長に事、如兄
事、如同僚に
與、家人の

○呂氏童蒙訓曰、事君如事親、事官
長如事兄、與同僚如家人、待群吏如
奴僕、愛百姓如妻子、處官事如家事。

如群吏之行
百姓之愛之如
妻子之如官事
之處事家事
之如事

然則後に能
吾之心を盡す
如毫末も至ら
不有は百我
心未盡末所有
也(未)に讓

或ひ問簿令
と佐る者也簿
爲に欲る所令
ひ従不奈何
伊川先生曰
當に誠意と

以之と動す當
今令と簿令和
争ふ是私意と
長若能父兄に事
之道と以之み
事過則ち已に
歸善則ち惟令
に歸不こと心
此誠意と積る
人動得不有
明道先生曰
一命之士苟に
心と物と愛する
に存人にかて
必ず濟所有ん

宋の呂好問と云ふ人の、童蒙への訓、其君
と大臣に云ふるは、親に云ふるが如く、官長と
重なるは、思ふに、同僚の一家の人、
よく郡吏の奴僕のごとく、百姓の妻子のごとく、
我官事の家事の如く、思ふ、然後能盡吾
之心、如有毫末不至、皆吾心有所未
盡也、
右の云ふは、心と盡す、心と盡す、
毫末も至らざるは、心の盡す、
或問簿佐令者也、簿所欲爲令、或
不從奈何、或人の問、簿の、
と縣令、伊川先生曰、當に誠意
動之、今令與簿不和、只是爭私意、令
是邑之長、若能以事父兄之道、事之
過則歸已、善則惟恐不歸於令、積此
誠意、豈有不動得人、
先生曰、
用ふ如、
の意と、
官の、
縣令、
明道先生曰、
一命之士、苟存心於
愛物於人、必有所濟、
初、
物と愛する、
の事、
まう、
高、
十四

劉安禮問臨民明道先生曰使民
生之日民之各
其情之輸
得使吏之御
之問曰
正以物と
格で

○劉安禮問臨民明道先生曰使民
各得輸其情問御史曰正已以格物

國家の治道は民の情の上下に通ぜ
るを為やう劉安禮といふ人問ける民の上にある
て下に臨む法は先生といふ人問ける民の上にある
愛憐して民の情を輸へて先生といふ人問ける民の上にある
つうの法は先生といふ人問ける民の上にある
正て他の物と格べ

伊川先生曰
日く是邦に居
て其大夫と非
不此理最好

○伊川先生曰居是邦不非其大夫
此理最好

童蒙訓に曰く
官に當る之法唯

○童蒙訓曰當官之法唯有三事曰

三事有曰清曰
慎曰勤此
三の者と知則
ち以て身と持
所と知矣

清曰慎曰勤知此三者則知所以持
身矣

官に當る者凡異
色の人皆宜之與
相接宜之不相
祝尼媼之類尤
宜之疎絶す

色人皆不宜與之相接巫祝尼媼之
類尤宜疎絶要以清心省事爲本

宜心と清事と
省と以て本と爲
とを要す宜に破

に在るの農人諸工商賈僧尼藝技は色人
に類するは人として相接せざるべし

是を慎む人又私欲の心とありて清らふ
是を職業の外なる無益の或は省する
是を勤むる

後生少年乍（ち）到官守（に）多為猾吏所（に）餌不自省察所得毫末而一仕之間復敢て舉動不

○後生少年乍（ち）到官守（に）多為猾吏所（に）餌不自省察所得毫末而一仕之間不復敢舉動（を）

大抵官（は）作て利と嗜ハ得所

の為に餌（を）とやう我（は）と釣（り）といふ不省察（を）一仕の間利ハ毫末をうりやて一仕もそくふ（を）舉動（を）とく私曲（に）あり大抵作官嗜利所得甚少

吏人の次品所此貴れ可也（矣）

而吏人所盜不貲矣以此被重譴良可惜也（大抵ありとに官とありて利欲とくく嗜りても吾得ところハ少くして）

官に當者ハ先暴怒心と以て戒と為事不可

者先以暴怒為戒事有不可當詳處（吏人の次品とくハ不貲とありきるふ此に依て重譴とかんむるこハ惜むる）

當必中不中無若生凡暴怒

之必無不中若生暴怒只能自害豈能害人（官に當りてハ暴に怒むハ人をたゞ害するに中べし何事ぞ不可とある諷と處りて考へ）

害す豈能人を害せんや（當に度）

當官處事但務著實如塗搽文字追改日月重易押字萬一敗露得罪反

重亦非所以養誠心事君不欺之道也

也（官職の務めなり實意第一とすべし）紀録の文字を塗搽又ハ月日を跡より追改め押字とて易き萬一それ事敗露

欺る不所以之

道にり（敗る重罪たるが誠を以て君に欺むがの）

道に非也

王吉疏と上りて

曰く夫婦人倫

の大綱大壽之

萌也世俗嫁娶

太蚤未人の父

母爲之道と知

未て而子有

是を以て教化

明を不て而

て民多夫と漢

○王吉上疏曰夫婦人倫大綱大壽

之萌也世俗嫁娶太蚤未知爲人父

母之道而有子是以教化不明而民

多夫王吉といふは漢の代の朝臣なり天子へ上りて曰く夫婦昏禮の事人倫の大綱大壽の命乃大に蚤すだたり女子十五六

教訓男子ハ二十ばより取組むたより子ありとて

文中子曰婚娶而論財夷虜之道

也君子不入其郷古者男女之族各

擇德焉不以財爲禮文中子曰婚娶而論財夷虜之道也君子不入其郷古者男女之族各擇德焉不以財爲禮

擇德焉不以財爲禮文中子曰婚娶而論財夷虜之道也君子不入其郷古者男女之族各擇德焉不以財爲禮

○蚤婚少聘教人以偷妾媵無數教

人以亂且貴賤有等一夫一婦庶人

之職也年少から婚姻の聘をいふは淫乱の道にさぐれ徳偷するのくどめ

司馬溫公曰凡議婚姻當先察其

壻與婦之性行及家法何如勿苟慕

壻與婦之性行及家法何如勿苟慕

壻與婦之性行及家法何如勿苟慕

壻與婦之性行及家法何如勿苟慕

壻與婦之性行及家法何如勿苟慕

壻與婦之性行及家法何如勿苟慕

壻與婦之性行及家法何如勿苟慕

壻與婦之性行及家法何如勿苟慕

及家法何如と
其富貴と
慕ふに
賢く
賤く
異時富貴
不と知ん乎
富盛と雖安
一時之富貴
而之と娶
夫と輕
姑に傲
性
異日
庸
乎借使
致婦
依て
夫之志
安定の
日く女
必ず須
勝者
に勝
人に事

其富貴皆苟賢矣今雖貧賤安知異
時不富貴乎苟爲不肖今雖富盛安
知異時不貧賤乎
富貴なり
賢徳あり
富貴なり
之所由盛衰也苟慕一時之富貴而
娶之彼扶其富貴鮮有不輕其大而
傲其舅姑養成驕妬之性異日爲患
庸有極乎借使因婦財以致富依婦
勢以取貴苟有丈夫之志氣者能無
愧乎
○安定胡先生曰嫁女必須勝吾家
者勝吾家則女之事人必欽必戒娶
婦必須不若吾家者不若吾家則婦
事舅姑必執婦道
向方へて
はく

姑に傲
性
異日
庸
乎借使
致婦
依て
夫之志
安定の
日く女
必ず須
勝者
に勝
人に事

勢以取貴苟有丈夫之志氣者能無
愧乎
○安定胡先生曰嫁女必須勝吾家
者勝吾家則女之事人必欽必戒娶
婦必須不若吾家者不若吾家則婦
事舅姑必執婦道
向方へて
はく

飲必戒戒婦と
娶にハ必ず須く
五百家に若者
須五百家に若者
則婦の舅姑に事
或問婦婦ハ
理に於て取可
不た似如何伊
先生曰然凡取
以て身に配す也
若節と失ふ者と取
て以て身に配す是
已も節と失ふ也
又問或ハ孤孀貧
窮みて託する無
者有ハ再嫁す可
は不日只是

○或問孀婦於理似不可取如何伊
川先生曰然凡取以配身也若取失
節者以配身是已失節也
又問或有孤孀貧窮無託
者可再嫁否曰只是後世怕寒餓死
故有是說然餓死事極小失節事極
大
又問或ハ孀婦の身めて貧乏の身めて託
されハ餓死せんことと怕るよりやせんこととの
うへ死するハ小きことと節と云ふハ大事なりと

後世寒餓の死
と怕故に是説有
然も餓死の事ハ
極て小なり節と失
ふ事ハ極て大なり
顔氏家訓に曰く
婦ハ中饋と主と
唯酒食衣服之
禮と事とす耳
國政に預使可
不家蠶と幹
如聰明才智有
て古今に識達セ
バ正當君子と輔
佐て其不足と
勸當必ず牝鶏
最に害以禍いと

○顔氏家訓曰婦主中饋唯事酒食
衣服之禮耳國不可使預政家不可
使幹蠶
婦人の役ハ食物供饋酒宴の事衣
服裁成などの事とつとるべしなり貴
妻の妻とて國の政に預るべしハ妻の家の
妻ハ夫の家の政に預るべしハ切外の蠶と云ふべしなり
如有聰明才智識達古今正當輔佐
君子勸其不足必無牝鶏晨鳴以致
禍也
君子不足と云ふことハ氣と徳と決して自身直に外の
事と云ふことハ聖人いふたやみて牝鶏の晨と
告る家の禍災

致と無也
 江東の婦女畧
 交遊無其婚姻
 之家十數年の
 間未相識未者
 或唯信命贈遺
 と以て慇懃を致
 す(未)國渡焉
 鄴下の風俗專
 り婦と以て門戸
 と持曲直と手
 ひ訟造請逢迎
 子に代官と
 求夫の爲に屈
 恒代之遺風乎

○江東婦女畧無交遊其婚姻之家
 或十數年間未相識者唯以信命贈
 遺致慇懃焉
江東ハ土地の風土で、子より
婦人ハ外の交遊を以てさへ
婚姻の家、十數年より大に識な
のあり、信命贈遺の、慇懃なはくさるなり
 鄴下風俗專以婦持門戸爭訟曲直
 造請逢迎代子求官爲夫訴屈此乃
 恒代之遺風乎
又鄴下といふ所の風俗ハ
婦人のがて門戸と持て
のあり、あつてハ、事訴訟の曲直とて、常に
客と逢迎、又ハ人の許へ造請、又ハ外の夫の
屈の咎と訴へ、又ハ子の官をたぐ
い土地の風俗なり是むより遺風儀なり

や恒代ハ燕
 の國なり

夫人人民有て而
 後夫夫婦有夫
 婦有て而後
 父子有父子有
 而後兄弟有
 一家之親此三
 の者而已茲自
 以往九族に至
 る故に人倫に
 重と爲也篤不
 可也
 (矣)於
 兄弟者形と氣
 氣と連之人也
 其幼も方て

○夫有人民而後有夫婦有夫婦而
 後有父子有父子而後有兄弟一家
 之親此三者而已矣自茲以往至於
 九族皆本於三親焉故於人倫爲重
 也不可篤
天地のけり人民生て夫婦と
よりあり夫より父子あり又兄
弟あり、又ハ此三より親族九族と
なり、我身と中にとり、曾孫より
曾祖父まで
 兄弟者分形連氣之
 人也方其幼也父母左提右挈前襟

父母左提右挈
前襟後裾食
則案案同
衣則傳服
學則業連
遊則共方
有悖亂之人
不能相愛也
其壯也各妻
其妻各子
篤厚之人有
不少衰也
能不相也
姊妹之比兄弟則踈
比之則踈薄之
人今踈薄之人

後裾食則同案衣則傳服學則連業
遊則共方雖有悖亂之人不能不相
愛也 兄弟之誠に形血氣と分ちて幼少
に共つて共方に遊食事の案も一所なり衣服
へ傳ふの學も連なり業なり衣なり
道に悖亂人物も幼年ハ及其壯也各妻
其妻各子其子雖有篤厚之人不能
不少衰也 壯年ハ各妻各子
篤厚なる人も心 姊妹之比兄弟則踈
表なりやうとかり 薄矣今使踈薄之人而節量親厚之

つて而親厚
之恩と節量使
猶方底つて而
圓蓋うら猶
必令不唯友
悽深至て傍人
之為に移所不
者免る猶に渡
矣

恩猶方底而圓蓋必不合矣唯友悽
深至不為傍人之所移者免矣 他人
かり 兄弟ハ踈薄道理なり家に家用給供
にかりてハ親も恩愛の中も姊妹の節量ま
さいかり不都合なりたへば方底に圓蓋とい
たすに異なりトハより 親厚中と傍人によりて
心と移るうられぬハすく 心の
うろハぬ人ハ右の過失と免べトとぞ

柳開仲塗曰
皇考家と云
孝且嚴且
望弟婦等
堂下に拜畢
即上手と上
面と低我白
訓誡と聽

○柳開仲塗曰皇考治家孝且嚴且
望弟婦等拜堂下畢即上手低面聽
我皇考訓誡 宋朝の大臣に 柳開仲塗といへる人
父の為人ハ孝心ありて嚴よりて月旦望日にハ弟
婦等堂下に面とさげ坐して其誡をうけりといふ

曰人家兄弟無不義者盡因娶婦入
窮不義者盡因娶婦入
無盡婦人娶
門異姓相聚爭長競短漸漬日聞偏
相聚因長
相爭短競
漸漬日聞偏
愛私藏以致背戾分門割戶患若賊
戾致門分
戶割心
賊離若若
婦人作所男
子剛腸者
幾人能婦人
之言爲に惑
さ所不吾見
多若等寧
是有耶退
是

曰人家兄弟無不義者盡因娶婦入
門異姓相聚爭長競短漸漬日聞偏
愛私藏以致背戾分門割戶患若賊
能皆汝婦人所作男子剛腸者幾人
能不爲婦人言所惑吾見多矣若等
寧有是耶退則惴惴不敢出一語爲
不孝事開輩抵此賴之得全其家云
之訓にいふ凡て人の兄弟不順弟不義の
あつてさうなり只婦人といふ異姓さうり娶ふふ
さう配くふ長くさう知さう漸漬偏愛私
藏めりて心も背戾分門割にかりて賊離のさう

則ち惴惴して
敢て一語と出で
不孝の事と爲
不開輩此に
抵て之に賴て其
家と全きを得
と云矣

伊川先生曰今人多不知兄弟之
愛且如閭閻小人得一食必先以食
父母夫何故以父母之口重於己之
口也得一衣必先以衣父母夫何故
以父母之體重於己之體也至於犬
馬亦然待父母之犬馬必異乎己之

伊川先生曰
今人多兄弟
之愛と知不
閭閻小人の如
一食と得ば必
先以て父母に食
ちむ夫何の故
父母之口已之口
より重と以て也
衣と得ば必ず先
以て父母に衣す

伊川先生曰今人多不知兄弟之
愛且如閭閻小人得一食必先以食
父母夫何故以父母之口重於己之
口也得一衣必先以衣父母夫何故
以父母之體重於己之體也至於犬
馬亦然待父母之犬馬必異乎己之

夫何の故ぞ父母
之體已之體なり
重と以也。大馬
に至て亦然。父母
之犬馬と待する
必ず已之犬馬に
異也。獨父母之
子と愛するに却
て已之子より輕し。
甚と一に者ハ仇敵
の若に至。世と舉
て皆此如し。或心
之甚し。乎矣。於
横渠先生曰く

犬馬也。獨愛父母之子。却輕於已之
子。甚者至若仇敵。舉世皆如此。惑之
甚矣。今日問答の小人といふは食物衣服をてし一品
ガバ。悲父母へそをかり。已の體へうく。父母重
によりて。やう馬犬もて。父母の大馬とあう。とは
異別なり。やうの理屈さぐ。みまべに兄弟の道へ不
知のち。かゝる兄弟ハ父母の子なり。まうふ。已の子とふ
く。愛し。父母の子ハ輕き。くみえ。又ハ仇敵にわのふ
りの。わり。是皆利し。
私意思の。或心なり。
○横渠先生曰。斯干詩言兄及弟矣。
式相好矣。無相猶矣。言兄弟宜相好。
不要相學。猶似也。人情人抵患在施。
之不見報。則輟。故恩不能終。不要相
學。已施之而已。詩經の斯干といふ。題の
相好。これ。兄ハやう。弟ハやう。まうふ。なり。彼
ガ善バ。五口も善う。ん。ざ。人ハと學す。に。彼く。セ。五口も
く。ま。べ。一。と。相猶。す。だ。な。ぞ。く。かり。ふ。の。人情の。い。
く。か。く。人。に。施。して。人。恩。を。お。り。い。報。され。べ。う。り
て。輟。く。ふ。く。未。然。く。あ。ら。ん。お。う。れ。バ。猶。と
ま。る。べ。ず。で。我。の。行。た。く。施。す。づ。き。かり。

相好す宜し。相
學と要せず。猶
似也。人情大抵
患之。施て報
見不。則ち輟に
在。故に恩終
能不。相學すと
要せず。已之を
施ん而已。宜し。渡
伊川先生曰く
近世淺薄なり。
相歡狎と以て。
相與すと爲す。
圭角無と以て
相歡。必す。と爲
此の如者。安んぞ
能久。ん。若く

○伊川先生曰。近世淺薄。以相歡狎
爲相與。以無圭角爲相歡愛。如此者
安能久。若要久。須是恭敬。君臣朋友
皆當以敬爲主也。近世の人々。心淺薄。の
た。ぐ。ひ。ハ。狎。く。歡。む。と

と要せバ須く是
恭敬ヲ須君臣
朋友皆當に敬
と以て主として爲當
也須當二度

横渠先生曰く
今之朋友其
善柔と擇で以
相與ふ。肩と拍
袂と執て以て氣
合と爲一言合不
合怒氣相加。朋
友之際其相下
と倦不と欲す。
故に朋友之間
於て其敬と主
とす者日々に相
親與一效を得

いふやうして相與り作法あるに圭角一としてありき
うく、安ん幾久くんやとく君臣父子兄弟朋友
のありき、恭敬あるや
幾久くもれふや、

○横渠先生曰く今之朋友擇其善柔
以相與拍肩執袂以爲氣合一言不
合怒氣相加朋友之際欲其相下不
倦故於朋友之間主其敬者日相親
與得效最速
今のよりよりハ善柔とつと二番
あいて氣の合しうでせられく
づれが怒心氣なるくくくく
一と倦不と欲す日身と引下しに
いふべし日に親く效あるべし

最速

童蒙訓に曰く

同僚之契。交
承之分。兄弟
之義。有。其子孫
に至る亦世之
講。前輩專
此。以て發。爲
今人之と知者
蓋少。又舊
舉將及嘗て舊
任の按察官。爲
者の如後。已
官上に在。雖も
前輩皆辭避
て下坐に坐風
俗此の如安んぞ
厚く不と得ず

○童蒙訓曰。同僚之契。交承之分。有

兄弟之義。至其子孫亦世講之前輩
專以此爲務。今人知之者蓋少矣。又
如舊舉將及。嘗爲舊任按察官者。後
已官雖在上。前輩皆辭避。坐下坐風
俗如此。安得不厚乎
義の交承のすべり
ハ兄弟の義理あり。又舊任の按察つ居人
又ハ舊をれを舉て人ヤハたふむべきなり。た
後々已が官上にありても身辭避て下坐に
居るべしなり。うにうて心ぞ厚くべし

○范文正公爲叅知政事時。生諸子

范文正公參知政事為時諸子之生曰曰吾貧時汝母養吾親汝母躬執與五口親之養汝母躬養之執而五口親之養未嘗克也今得而厚親之養之則均是子孫固無親疎也苟宗之意無親疎則饑寒者吾安得不恤也自祖宗來積德百餘年而始發於吾得至大官若獨享

曰吾貧時與汝母養吾親汝母躬執爨而吾親甘旨未嘗克也今而得厚祿欲以養親親不在矣汝母亦已蚤世吾所最恨者忍令若曹享富貴之樂也吾吳中宗族甚衆於吾固有親疎也然吾祖宗視之則均是子孫固無親疎也苟宗之意無親疎則饑寒者吾安得不恤也自祖宗來積德百餘年而始發於吾得至大官若獨享富貴而不恤宗族異日何以見祖宗於地下今何顏入家廟乎於是恩例俸賜常均於族人并置義田宅云

固に親疎有也然五口祖宗之視之則均く是子孫に固に親疎無也苟祖宗之意親疎無ハ則ち饑寒の者吾安んぞ恤まんと得。祖宗自來と徳と積と百餘年而して始て五口に發大官に至ると得。其の獨富貴と享て而して宗族と恤まハ異日何と以て祖宗に地下に見へん今

正公の參知政事たり。其の子息に入り。されくは汝母と我と夫婦一所に五口兩親にや。かゝる事。汝母手づから飯を爨。り。ふれども五口親いささ。其の甘旨。十。分。官。俸。も。今。厚。祿。と。得。る。汝母も。一。人。に。金。世。一。過。さ。り。汝母も。汝母も。富貴のた。め。と。享。又。心。も。か。け。た。く。忍。び。て。五。口。に。吳中。の。宗。族。甚。と。衆。に。り。て。親。に。ハ。疎。に。ハ。多。く。五口。宗。祖。より。視。ハ。均。き。子。孫。の。親。疎。ガ。一。と。ハ。祖。宗。の。心。と。一。と。ハ。饑。寒。の。苦。と。も。恤。み。す。べ。き。に。生。祖。の。積。徳。を。め。て。吾。等。に。大。官。に。り。て

何の顔の家廟に在らん乎。是に於て因例奉賜常に族人に均く并に義田宅を置と云々(笑)於也

下に獨り立身して宗族を恤す何の顔の地に就祖に逢てや神靈の家廟へ入る義理人へはかり、是より君の恩例奉賜も均く族に均く又田地宅を別めて一族と云々

司馬溫公曰く凡家長と為て必ず禮法と盡守りて君子弟及家衆と御之に分て職を以て授に事と以て而して其成功と責め財用之節と制し入と量て以て

○司馬溫公曰凡為家長必謹守禮法以御羣子弟及家衆分之以職授之以事而責其成功制財用之節量入以為出稱家之有無以給上下之衣食及吉凶之費皆有品節而莫不均一裁省冗費禁止奢華常須猶存

出と為家之有無に稱て以て上下之衣食及吉凶之費に給とす皆品節有り而て均一とす不其冗費と裁省し奢華と禁止し常に須く稍贏餘と存て以て不虞に備須二度

贏餘以備不虞 家内之羣の者へつとて職事と授その成功と責め財用の節と制の外より入る出るの多少家の有無に稱て衣食の品に萬事の費は品の品節あるべし何事も均くして冗費と裁省て奢華と禁止て常々もめと贏餘て不虞のふ備べしとて

右廣明倫

小學卷之六終

沐親取命

司馬溫公曰凡為家長必謹乎

法以御羣子弟及家衆分之以教

訓

訓

訓

訓

文苑堂

